

外務省地方連携推進室での外交実務研修

平成30年6月

外交実務研修員 木村 祐輔

(東京都より派遣)

1. はじめに

私は、本年4月より東京都から派遣され、外交実務研修員として大臣官房総務課地方連携推進室にて勤務させていただいております。まだ着任して僅か3か月ですが、地方連携推進室での担当業務や、計4年間の外務省勤務への抱負等、簡単ではございますが、寄稿いたします。

2. 東京都でのこれまでの職務について

平成26年度に東京都に入都し、最初は港湾局で、都内の港湾施設や海上公園、港湾道路等の維持・管理に係る予算執行管理に従事しました。局や事業担当者との細かい調整に苦慮した中、あらゆる職務の基礎となる予算事務の重要性を学んだ2年間でした。また、上司や船員さんに連れられ、船で東京港内の様々な現場に足を運んだことは良い思い出です。

その後、防災系の部署に異動し、契約事務に携わりました。都の防災事業と一言で言っても、東京防災、備蓄推進、帰宅困難者対策、火山、水害、防災訓練と枚挙に暇がありません。その多岐に渡る事業に契約を通して触れたことは、都民に及ぶ都政の影響の大きさを実感する良い機会となりました。

3. 外務省勤務にあたり

現在私が所属している、地方連携推進室ではオールジャパンでの外交力強化を目指して、地方の国際交流等の支援を行っております。例えば、姉妹都市との交流事業や、外国人インバウンド誘客、特産品の海外販路拡大等、近年地方自治体も幅広い国際業務に取り組んでいます。それらの事業を支援するため、在外公館での広報活動や、駐日外交団へのPRを実施することが、当室での職務となります。その中でも、私が担当させていただく主要事業を2つ紹介させていただきます。

(1) 『地方創生支援 飯倉公館活用対外発信事業』

外務大臣と地方自治体の首長との共催で、駐日外交団などを外務省の迎賓施設である飯倉公館に招き、その地方の多様な魅力を内外に発信する事業です。平成27年から岸田前外務大臣のイニシアティブで始まり、昨年度まで計14回実施されています。自治体にとって、外務大臣と共催というネームバリュー、外務省のもつ在京大使館、外国報道関係者とのネットワーク等のアセットを存分に活用し、効果的なPRが可能となります。また、参加外交団にとっては、その自治体の観光や食、文化、伝統芸能といった魅力を全て東京にしながら体験・満喫できる大変貴重な機会です。



高知県との共催レセプションの様子

現在、平成30年度のレセプション実施につき作業を進めており、自治体の首長と外務大臣の日程調整を始め、あらゆる調整事項が発生するため苦労も絶えませんが、反面、東京都では経験したことがないような業務規模の大きさに日々やりがいを感じています。本事業をきっかけに、その自治体と外交団の繋がりができたり、伝統工芸品の販路拡大に繋がったりした事例もあるため、私もその様な成功事例に繋がるレセプション実現に向け努力を続ける所存です。

(2) 『地方視察ツアー』

外務省と地方自治体との共催イベントで、駐日外交団の地方視察を実施します。駐日外交団に各地方が誇る歴史・観光・文化・産業施設などの魅力を直接体験してもらい、その地域の魅力を発信するための事業です。平成22年に開始した事業で、昨年度まで、計28回実施し、延べ約600名の駐日外交団が参加しています。

平成30年度は計5回実施予定で、そのうち1回を、5月15、16日に新潟県の燕市・三条市で行いました。13か国1機関から計19名の参加外交団に対し、燕・三条地域が誇るものづくり技術・文化等をPRしました。着任後、初めて手掛けたイベントということで至らない点も



三条市北五百川の棚田にて外交団の集合写真

多々ありましたが、参加外交団より燕・三条地域についてポジティブなコメントをいただき非常にほっとしています。また、今回のツアーが今後、燕市・三条市の国際事業拡大の一助になるのであれば、担当として嬉しい限りです。今年度の残りのツアーも、自治体職員ならではの視点を持ち、共催自治体にとって、より効果的なツアーを開催したいと考えております。

4. おわりに

東京都にいるときから、将来は国際業務に携わりたいと漠然とした希望は持っていました。しかし、まさか外務省で働く機会をいただけるとは、夢にも思ってもいなかったです（3月までと生活が大きく変わり過ぎて、未だに信じられないぐらいです）。

これからの4年間は人生の中で最も貴重な時間であり、そこで何を不得、将来どう活かすかは自分の努力次第だと考えております。そのためにも、人との繋がりを大切に、日々一生懸命職務に励みたいと思います。

最後になりますが、この様な貴重な機会を与えて下さった外務省及び東京都、そして日頃より丁寧にご指導いただいております地方連携推進室の皆様には感謝申し上げます。本稿を締めさせていただきます。